

## 他教科との連携による古典授業の試み

—日本史・世界史と進度を合わせることによる

知識の定着と興味・関心の涵養の可能性—

国語科 戸田 康代

本実践は、古典と日本史・世界史が人物や人間関係・内容を理解するための基本的事項の重複が多いことを活かすため、古典教材の順序を日本史・世界史に合わせて授業を行うことで、生徒たちの知識の定着や古典や歴史に対する興味・関心、より深い思考を培うことができるか、を試みたものである。

<キーワード> 他教科連携 古典 日本史 世界史 授業展開 時代順教材配置

### 1. 実践の動機と目的

以前から日本史の教員と情報交換をしていて、当時の生活やしきたり、用語など、古典と重複して説明していることがかなり多いことを認識しており、生徒たちの知識の定着に効果的な教科間の連携・協力方法はないかと思案していた。また、授業中、それらを生徒に説明している際、生徒の反応は、まるで初めて聞いたかのようなものであることが多いことを日本史の教員からたびたび聞いていたが、それが、説明している教員への配慮なのか、聞いたことを本当に覚えていないのか、他教科とのリンクができていないのかは、不明であった。一方、古典を教えていて、文法事項を踏まえた正確な逐語訳はできているものの、そこに既習の知識を結びつけたり考えを広げたりして、教材を全体として把握し理解しようとする大きな視点に欠ける生徒が少なからずいることを、特にここ数年感じていた。

新学習指導要領においても「カリキュラム・マネジメント」が重視され、平成 28 年 12 月 21 日に中央教育審議会によって出された答申にも「各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点でその目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと」(第 4 章 2 (2) ①) とある。

それらを踏まえて、古典教材を正確に理解した上で、さらに大きな視点・思考で捉え、自分の考えを持たせるにはどうすればよいか、古典の世界や日本の文化に興味を持たせ、自らそれを深めていく姿勢を養うのに効果的な授業展開はないかと考えた。また、文学史事項についても、教員の説明や記述事項を暗記するのではなく歴史や文化の流れの中での一つとして捉えさせ、古典で扱う作品や文化を歴史的事項や本文の記述の情報と総合して理解させ、そこから得たことに対して自分の考えを持たせたいという期待もあった。

そこで、古典 B の教材と日本史・世界史の中国史とを結びつけることによって、生徒の知識・記憶の強化ができるのではないかと考え、実践し、その効果を生徒たちに自己判断してもらった。以下はその報告である。

## 2. 実践の概略

### (1) 実践の対象と教材の選定

実践は2年生文系3HRで行った。いずれも習熟度展開はされておらず、成績分布も差はない。日本史・世界史の人数バランスは、2HRは20名と20名の同数。1HRは25名対15名で若干日本史が多いバランスである。

教科書は、大修館「精選古典B」を使用している。その教材を、教科書掲載順序ではなく作品成立順、あるいは作品に登場する人物の年代順で授業を行った。連携する日本史の進度は1学期から2学期にかけて奈良時代から鎌倉までを行うので、それぞれの時代や事項と関連が深い教材を日本史の進度に合わせて実施するようにした。

『伊勢物語』『枕草子』『大鏡』『平家物語』は、教科書に載っている教材のうち、日本史でも登場するであろう人物が出ている教材を敢えて扱う、あるいは触れることを意識した。世界史においては、四書五経、『史記』について、中国史を扱っている時期と重なるように授業を行った。以下に具体的に扱った教材を挙げる。

#### 教材順序 古文

(導入 説話)

万葉集

土佐日記「阿倍仲麻呂の歌」(阿倍仲麻呂 奈良時代)

伊勢物語「渚の院」(惟喬親王 平安前期)

徒然草(教育実習との関連)

大鏡「道真左遷」「花山院の出家」(菅原道真、花山天皇、藤原道兼 平安前期～中期)

枕草子「中納言参りたまひて」「二月つごもりごろに」

(清少納言・藤原隆家、藤原公任 平安中期)

平家物語「忠度都落ち」(平忠度 藤原俊成 平安末期～鎌倉前期)

方丈記「安元の大火」(鎌倉前期)

更級日記「あこがれ」「源氏の五十余巻」(平安後期)

源氏物語(平安中期)

#### 漢文

(導入 故事成語)

詩経「桃夭」(3年次に配当されている教材)

史記「鴻門の会」(我取りて代わるべきなり)(大丈夫当に此くのごとくなるべきなり)

(沛公項王に見ゆ)(樊噲目を瞋らして項王を視る)

「項王の最期」(四面楚歌)(我何の面目ありて之に見えん)

### (2) 授業展開の方法

授業では、まず文法事項の確認や逐語訳を行い本文に忠実に正確に読むことを徹底した。この時点では、登場人物や歴史的事項には深く触れず、教授者からの説明や調べる作業などは、逐語訳に必要なことのみ留めた。

一つの教材が終わったところで、国語便覧や視聴覚教材、場合によっては日本史や世界史の資料を使

用しながら、人物関係を把握させ、歴史の流れの中のどこにその教材や内容が関わるのかなどについて調べさせ、気づいたこと考えたことを生徒同士で報告させあったりして、授業で扱った古典教材を広く、大きく全体を把握させることを行った。

### (3) アンケートによる生徒の把握

1学期末、2学期末時点でアンケートを行い、実施の効果を、生徒の主観として答えてもらい、授業に対する全体としての感触や傾向を分析した。

## 3. 実践での様子

全体の把握をする時間を確保するため、逐語訳ペースを昨年度より早め、1年次では丁寧に行っていた文法事項の説明については、既出のものは確認を敢えて省いた。その結果、自分で助動詞の意味などの文法事項を考えて訳し、不明な点、不安な点を授業後に質問に来る生徒が大幅に増えた。これについては、後から述べる生徒のアンケートでも「授業の進み方が早くなった」「助動詞などを全部言ってくれなくなった」など否定的に捉えている意見があった。

資料を使って全体を把握する際には、古文では便覧の天皇家と藤原氏と天皇家の関係系図、官位相当表、平安京地図、暦法などを、漢文の『史記』においては漢楚抗争の地図を多用した。歴史上実在する登場人物を、身分や人間関係の中で歴史の中での立体的な人物として捉えさせることを意識し、話の展開を改めて追わせた。

生徒各自で資料を基に全体を把握させた後、教授者がテーマを与えて、近隣の生徒同士で意見交換をさせた。たとえば、『大鏡』「花山院の出家」では、系図を使って人間関係を把握させた後、「花山院が出家することで誰がいちばん得をすることになったのか？」という問を投げかけた。また、『平家物語』「忠度の都落ち」では、源平の合戦の年表と教材に描かれている忠度・俊成の言動と対応させた上で、忠度・俊成の言動に込められた心情を問うた。1年次から正確な理解のための意見交換、作品に対する自分の意見を持ち、他者の意見を聞く意図での意見交換、をできるだけ取り入れてきているため、生徒たちはこの活動に慣れており、今回の試みでの生徒同士の意見交換もかなり活発に行われた。

## 4. アンケートから読み取れる生徒の教材や古典世界への興味関心や理解

2年の4月当初、7月の1学期終了時点、12月の2学期終了時点での、古典に対する好悪と得意不得意を聞いた。好悪、得意不得意のいずれも4月→7月→12月と授業を受けてきて、好き、得意と感じる生徒が増えていることが数値から読み取れた。8ヶ月間、古典教材と歴史の進度に対応させた授業を受けて、どう思ったか、という質問については、「古典に親しみがわいた」「古典の内容や話の展開がわかりやすくなった」の選択肢を選ぶ生徒が多くいた。また、自由に書いてもらった記述には「古典で登場人物のことをくわしく知ることができたので、歴史でその人のやったこと、名前など覚えやすくなった。」「古典、歴史、それぞれのテスト勉強などに役に立った。」などとあり、古典・日本史や世界史の考査の点数に直結するというあからさまな効果が出たことがいい印象を持つ原因になっていると考えられる。

また、1年次の古典分野と現在の授業展開とを比較しての意見を問うたところ、2年になってからのほうが理解しやすくなったと答える生徒が多かった。理由を自由に書いてもらったところ、歴史と平行して授業を受けることでそれぞれの知識同士が結びつき理解が深まったため、基礎的な文法知識が身についたため、と答える生徒が多くいた。

## 5. 実施の反省と今後の課題

7月の時点では、特に漢文は『史記』に入って間もないころであったため、世界史選択の生徒たちの中は疎外感を持った者がいたようである。1学期に行ったアンケートでは「日本史選択の人がうらやましい」といったような記述も見られた。その結果を踏まえて、2学期以降は授業で歴史的事項を提示するときに当該以外の選択者に配慮するように努めた。例えば、日本史に関連する事項については、日本史選択者が世界史選択者に歴史的事項を解説することで互いに共通理解を持たせる時間を設けるなどである。12月のアンケートの時点では、古文・漢文とも日本史・世界史と関連する教材を扱った後であったためか、1学期のような意見は見られず、逆に自分の選択ではない歴史や古典教材に興味が出てきた、との意見が見られた。日本史あるいは世界史の単独展開のHRでない限り、今回の実践の方法では不公平が出てしまう。それをどのように改善していくか、今後の課題である。

また、生徒の意見・要望を自由に記述してもらった中に、今回教材で扱った以外の日本史・世界史の登場人物や事項についても古典で詳しく授業してほしいとの意見も複数あった。また、この実践をすることで、既知の知識相互の結びつきや、それらへの興味・関心は高まったが、逆に、未知の事項や作品・作品中の登場人物の把握に対する苦手意識が高まってしまった、という意見もあった。教科連携によって相互の知識の定着をはかる意図が、生徒の依頼心を高めてしまい、自ら深めていくことの妨げになったり、未知の事象へのバリアを作ったりする可能性もあることを反省した。

昨年度と今年度で授業の理解に変化はあったか尋ねたところ、多くの生徒が今年度の方が理解しやすくなったと答えた。その理由を自由に書いてもらったところ、大きく分けると2つの意見があった。1つは日本史・世界史と古典教材とのリンクによる効果、もう1つは1年次で基礎・基本の古典文法の習得や、予習を徹底させることによって古典教材へのアプローチが容易になったことである。これらのことから、この試みは、1年次で古典文法を一通り学び、それらを用いて自分たちで教材にアプローチできるレディネスがある2年次で行うことで、生徒の理解、興味関心をより涵養できるのではないかと考えられる。

定期考査の毎に授業ノートを回収し確認している。2年になって、一つの教材が終わるたびにその教材に対する自分の意見・感想を自主的に書いてくる生徒が出はじめた。一人の生徒が『平家物語』「忠度の都落ち」について、「すごく長いお話だったけどおもしろかったです。…(中略)…忠度が俊成とおわかれする場面がすごく切なかったです。平氏が負けて一族が終わっていくのを見ると時代の流れを感じられて歴史ってすごい!と思えます。」と書いてきた。この生徒は世界史選択の生徒で、古典においては、平素高得点を取る生徒では決してない。しかし、この教材を『平家物語』という長編の中の一つ、平家滅亡の大きな歴史の流れの中の一つと捉え、その中で生きた人物を立体的につかみ、それに対して感動を持つ、その感動を記述によって表現する、このような生徒が出てきていることは、今回の取り組みは何らかの効果があったのではないかと、改善する点は多々あるが今後につながる実践ができたのではないかと考える。

## 5. まとめ

教科間での連携は、教員同士の情報交換や情報共有を常に行い、その情報を逐次授業に反映させていく必要がある。教員にとっては時間的、物的な負担になるかも知れないが、生徒たちの知識の定着や興味・関心、より深い思考には一定の効果が認められると考えられる。

今後も機会を設けて他教科・他校種との連携を積極的に行い、生徒にとって有益な授業展開ができるよう、取り組んでいきたい。

## 6. 謝辞

本実践においては、本校地理歴史公民科 酒井類教諭、地理歴史科 小田原健一教諭に多大なるご協力とご助言をいただきました。本当にありがとうございました。

また、同学年を担当している渡邊寛吾教諭をはじめ国語科の先生方には、例年の教材順序からの大幅な変更と3学年用の教材の使用をお許しいただきましたこと、心より感謝いたします。

## 参考文献

「高等学校学習指導要領解説 国語編」(文部科学省)

「よくわかる中教審「学習指導要領」答申のポイント」(新教育課程実践研究会編、(株)教育開発研究所)